九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

人知の基本構造 : 旧約聖書「創世記」を中心に

上田, 富美子
九州大学医療技術短期大学部一般教育

https://doi.org/10.15017/149

出版情報：九州大学医療技術短期大学部紀要. 12, pp.37-42, 1985-02-28. 九州大学医療技術短期大学部
バージョン：
権利関係：

人知の基本構造

—— 旧約聖書「創世記」を中心に ——

上田　富美子*

La structure fondamentale de la raison dans la Genèse

Fumiko　Ueda

これまで人知ないし「理性」(raison) に焦点を当て数々の論究を重ねてきたが，そのことの中でおのずから一つのかたちが定まるのを禁じえなかった。それは「創世記」の中の，あの人類の祖先の物語である。そこには人知すなわち「人間」(homme) の根元的な問題を解く重要な鍵が隠されているように思えてならない。そこで以下この問題について可能な限り接近をはかり，人知に関する考察に一つの総括を与えることができればと考える。

1

禁断の知恵の木の実に触れることによって，人類の祖先アダムとイヴの在り方には決定的な変化がおとずれる。その第一は「目開け」と言われたことがそれであり，(1) 第二は自らの裸に気付き，無果花樹の葉で身をおおい神の目を避けて樹間に身を隠したと言われている点である。(2)

これらは一体何を意味するのであろうか。まず目は何よりも自分自身に向って開かれたのであり，このことはとりも直さず「自意識」(conscience de soi-même) の誕生，「反省知」(réflexion) の目覚めに相当するであろう。「人間」(homme) であることの出発がまずこの点で押えられていることは，特筆に値する事柄である。

ところで「開けた目」が捉えたものは何であったか。それは言うまでもなく自らの「身（肉）体」(corps) である。さてここで注意しなければならないのは，まず「目開け」という事態が，続いて「身（肉）体」を見るという事態が生じ，これら二つの事柄が順を追って二段構えに提示されている点であろう。これら両者の間に置かれた段落は，極めて重要な意味をもっているように思える。すなわち「開けた目」，自覚的な「知」は，自らと異なるものとしてその「身（肉）体」を向うに押しやり眺めたのであり，ここには，「見るもの」(voyant) と「見られるもの」(vu) の截然たる区別が設けられている。見られている「身（肉）体」は，ただの「対象」(objet) として「知」の前にある。両者は相対峙し，その資格を異にする。私たちはここに，「精神」(esprit) と「身（肉）体」ないし「物体」(corps)(3) の分離，そしてまた主・客関係の原初的なかたちを見出すであろう。これらはまさに「自意識」ないし「反省知」のおのずから誘発したものにほかならない。しかもこれらのことは自覚的な「知」に由来するのであるから，「意志」(volonté) と無関係でありえないことも十分に予測されよう。だがこの点については後に改めて言及することにしたい。

ところで以上の事態に必然的に随伴する事柄として，自らの「身（肉）体」を恥じるという行為が挙げられるが，そのことはすなわち「身（肉）体」を低劣なものと見なす見方につながっている。何に対してか。言うまでもなく「知」ないし「精神」に対してであろう。これらのことは上記の事態からおのずと導かれる。すなわち「反省知」は心身関係，あるいは主・客関係をもたらしたが，これら関係における両項は対

* 九州大学医療技術短期大学部一般教育

等ではありえない。上述のようにまず「目が開け」，それから「身体」を見るという行為が生じた以上，その先後関係は明確である。そのことは何よりもこの人類に訪れた未曽有の変化，人類を人類として印付けた「反省知」の構造そのものがすでに「対象」を必要とし，それを包摂しているのであって，後者は前者から導き出されはしても，決してその逆ではありえないということを示している。したがって「知」がなければ「対象」というものは当然出現しなかったはずだし，その点で「対象」は「知」に対しあくまで二次的，派生的な意味しかゆだねられていない。この関係はそれゆえに，決して対等なかたちをもっていないと言うべきであろう。「知」の側に絶対的優先権は握られており，「対象」はその従属物に過ぎず，その低められ卑しめられた在り方が恥ずかしさを誘う存在でしかない。そして同時に「対象」は究極には，「知」ないし「精神」から完全に区別された「身（肉）体」であり，「物体（質）」である。したがって「対象」あるいは「物体」という言葉が発せられた時点において，これらの言葉はそもそも二次的な意味しか付与されてはいないと見るべきであろう。

2

さてつぎに人類の祖先を待ち受けていたものは，神の禁を犯した者にくだされる罰，すなわち荒地への追放であった。(4) ところでここで言及しておきたいのは，聖書の叙述の順序の驚くべき論理整合性についてである。物語を貫くものがもしそうしたものであるならば，当然後続する事態は先行するそれの帰結ということになるでもあろうが，事実はまさにその通りであり，すべては予定に添った行動のごとくみごとに展開してゆく。だから不毛の地に追いやられた彼等は，その悪条件にもかかわらず生きのび繁栄を重ねることになるのだが，その根拠となるものは追放に先立って彼等に生じた新たな現象，すなわち「知」への目覚めであったことは言うまでもない。このいまだかって地上のものが経験したことのない新しい「知」は驚嘆すべき力を発揮し，ほとんど不可能と思えるものをさえ可能にすることをなしとげえたが，それはどうしてなのか。無論その答えは「知」の構造そのものの中に，用意されていると言わなければならない。

前述のようにそこでは「対象」は必然的に低められ，二次的，派生的な位置しか与えられていないのであるが，さきに触れたように「知」が意志的なものと無縁でないとすれば，(5) それはすなわち，「対象」が「知」によって支配され，「知」の意のままにそれに仕える存在であることを示す。「対象」はただの「素材」(matière) であり，「知」の手を経なければ「何もの」(quelque chose) でもありえないし，何らの「意味」(sens) をも付与されることはない。逆に言えば，その「意味」と「価値」(valeur) とは「知」によってのみ測られる。「知」の認承を得たものだけが，はじめてその「存在」(être) を主張することができる。「目開け」た時，人はすでに自己の外にある世界をそのようなものとして読み取っていたのだ。さらに言えば，人間の目に映る「世界」(monde) とはそのようなものでしかありえない。「世界」ははじめから無記なのではなく，そのように仕分けられ筋目をつけられたものとしてあった。まさに「知」は「ことわり（事割）」であり，「ことわけ（事分）」であり，「道理」であったと言うべきであろう。だとすれば，人知が「言葉」(langue) と不可分な関係に置かれたことも十分にうなずける。「目が開け」たことは，実際に音声化された「言語」(parole) を伴おうと伴うまいと，「言葉」に転化できるかたちで「世界」を見ていることに変りない。「世界」は読み取り可能な「分節化」(articulation) を伴ってしか，人間の目には映じえなかったと言える。さらに言えば「知」に目覚めた人間の目は，「世界」をすでに自らの埒内に取り込み，自らに役立つように切り取って見ていたということであろう。そしてもしもそうならば，不毛の大地を沃野に変えることさえ人間にとっては決して不可能でないことになる。「知」の本性自身がすでにそうしたことを内包しており，その構造自

体がそのような結果を先取りしているのであるから。

しかも以上のことは同様に「道具」(instrument)の生れる必然を含み込んでもいる。なぜなら「知」のほかの諸物はすべてそれに支配され，それに奉仕することを定めとするとすれば，それらはみな「知」の「手段」(manière)にほかならず，「道具」への転換の可能性をそれ自身もっているからである。それらは自立せず依存的で，人間の承認と利用とをまってはじめてその存在と意味とを付与される。そうした素地の中で，その「道具性」(instrumentalité)の特別際立ったものがたまたま「道具」と呼ばれるに過ぎないと言えよう。そしてその「道具性」の突出は，とりも直さず自覚的な「知」がとりわけ意識的・意図的に働いていることを示すことでもあるから，「道具」が人間の在り方を代表する一つの典型とされるのもゆえなしとしない。実際，「言葉」もコミュニケーションの「道具であり，私たちを取り巻く一切のものは何らかの意味で「道具性」を帯びている。そうした点で「知」に目覚めたアダムとイヴの取った最初の行動が，木の葉を身にまとうことであったのは極めて象徴的であると言える。というのは木の葉はこの場合，衣類に代るものとして，明らかに道具的役割をになわされているのであるから。

ところで，「道具」の問題に関連して当然取りあげらるべきものに「身体」(corps)の問題がある。「身体」は私たちにおける外なるものであり，それ自身が私たちの意のままに働く「道具」である。それは私たちの真近にあり，その意味で「世界」の道具的在り方をまずもって私たちに開示する恰好のものと言える。それは外界と私たちとの中間に介在し，その外界への支配を可能にする尖兵の役割をになっている。「道具」がまず「身体」をモデルにし，またその延長線上につくられたのは，したがって大きな根拠をもっている。一方，「身体」が「知」とは全く別の「物体」に帰属するものとして，単なる「道具」と見なされたことは，その酷使をも極めて容易なものとしたに相違ない。人類の租先が荒野を肥沃な耕地になしえたことの裏には，こうした「道具」の製作と使用，さらには「肉体」の酷使があったことは容易に推測できる。

これらのことはまた，私たちに「文化」(culture)の必然についても何ごとかを告示してくれる。「知」の「対象」へのかかわりないし広くは外界へのかかわりはすべて「文化」であり，さきに述べたように「知」の構造自身がその「対象」を必要とする以上，私たちが存在することそのこと自体が「文化」を刻々に産出する営為であるとも言うことができる。「文化」は人間の生の軌跡であり，地上に刻みつけられたそのしるしである。そしてこの「文化」という人間に馴致された外的空間は幾重にも私たちを取り巻き，人間的環境として私たちを手厚く庇護する役割をも果してきた。他の動物のように厚い毛皮も鋭い爪も牙も，天駆ける翼をも所有せず，ほとんど素裸のまま荒野に投げ出された人間が入手しえた，それらすべてに代って余りあるものがこれであったと言える。したがって「知」と「知」を中核とするあらゆるものが，人類の生存と繁栄をあげて約束したと言っても過言ではあるまい。

さて「文化」が地にしるされた「人間」の在り方そのものとすれば，私たちはそこに人間本質探求の具体的手がかりを得ることになろう。これが「文化」の有利な点である。そこで，そこへと投影されることによって一そう明確なかたちを提示するかに見える「知」の問題に再度視点を当て，ここにその確認と補完をはかることにしたい。「文化」は生(なま)の「自然」(nature)と「人間」との間に介在し，中間的媒介的な在り方を示しているが，それは何よりも「知」の間接的性格を映し出すものと言うことができよう。そのことは当然，「知」の目覚めがまず自らを顧みることにはじまることと密接な関係をもっている。この行為によって外界との関係は一たんその根を断たれ，直接的な性格を失い，二次的なものになるとともに間接的媒介的性格を付与されることになった。そしてそれが「文化」の在り方に如実に反映している。第二に「文化」

は生成発展という一方向しか見出すことができないという点である。歴史の展開はその痕跡を空間的にも拡大し続け，その進展の勢いを阻止することはほとんど不可能に近い。「文化」に後帰りという事態はありえない。そしてこれもまた，人知の原初の在り方にその根拠をもつ。人知が自らを顧みることから出発した時，そのこと自体に何らの制約もありえなかった。それがあらゆるものの始元であった。言うまでもなく，このことが人間の「知」ないし「意志」の「自由」(liberté) の基盤を形成している。こうして「精神」には何の束縛もない無限の領野が確保されることになり，限りない前進と向上が人間に約束された。これが人間の不可能を可能にする力の源泉であり，それはみごとに「文化」の在りように映し出されていると言うことができる。(6)

さて以上よりして私たちは「人間」の根本問題，換言すれば「知」の根本問題が結局ある一点へと収束してゆくことに気付く。それはすでにいく度か示唆したように，あの自らを顧みるという行為にほかならない。これは一見何気ない行為のように見えて，実は重大な意味を隠しもっている。それはおそらくこの地上において人間だけに出現しえたものに違いない。それが人間の特異な在り方を確定した。地を這う獣や虫たちと異なり，一たんこの大地から自身を切り離した上で再びそこへと立ち戻る人間の在り方は，彼等を地上の「孤児」(orphelin) とする一方で，その「支配者」(dominateur)たることをも可能にした。(7) 「本能」(instinct) と「知」ないし「理性」(raison) との決定的相違は何よりもまず，この内への屈折をもつかもたないかによるであろう。それはたしかに人間に無限の「自由」と「進歩」(progrès) を保証し，文化的景観は地上に充満しその繁栄を誇示するかに見える。人間におけるよきことはすべてこの印をもち，それは人間であることの証拠となった。人知はよく「光」(lumière) にもたとえられる。それはたしかに一度内部へと屈曲することによって，自らを光源となしえ光度を増すことができた光でもあったろう。だが「光」には「影」(ombre) が必然的に付随する。歴史の歩みはようやく，その「影」の部分を際立たせはじめるところにきているように見える。私たちはいまや，そこへと視点を移すことを余儀なくさせられている。だがこれもまた，自らを知るためには避けて通れない道でもあろう。そこで以下この点についての論究をはかり，併せこの小論の結びとしたい。

3

人間の場合すべてを自己に引き戻すことから諸事がはじまるのが特異な点であり，またこれこそが「自由」と無限の「可能性」(possibilité) を開く根拠となっていることは，さきに見た通りである。そしてそのことは「知」があらゆるものの始元であり，「知」の前には何もなく，すべてはその後から来ることを意味した。人間は何の制約もなく，自らのほしいままなまなざしを万物に及ぼし，それらを自己にとって役立ちうるもの，意味あるものに改変することができた。だが「知」がすべてに先立し先行するということは，「知」は無前提的「絶対」(absoluité) であり，他の何ものの保証も要さないということでもある。「知」は果してより高次のものの証認を少しも必要としないほど，それほど究極的なものなのであろうか。その承認を与えたものもまた「知」自身以外のものでなかったとすれば，この行為を主観的「独断」(dogme) から区別する根拠をどこに求めればよいのであろうか。人間はたしかに，自覚的意図的に「知」を始元としたのであった。したがって，それは自意識によって補強されてはいる。だからといって，それが客観的に正しいかどうかということは別問題であろう。それは自画自讃のおそれなしとしない。「知」は「理性」は，たしかにあらゆる人間に，それが人間である限り適合する「普遍的」(général) なものであろう。だが人間以外の他の類についてはどうか。私たちはこれらのものをすでに「知」に装置された優越性の視点からしか見ることはできない。私たちには

前もって公平の観点が剝奪されてしまっている。してみると，ここにいわゆる「知」は「人類エゴ」(égoïsme du genre humain)と切り離せないものではないのか。だからこそ，「知」の中には徹底した「支配」(domination) の一筋道しか用意されていなかったのではないのか。倦くことなき支配と蹂躙。それが「知」による世界解読の裏につねに潜み隠れていたと言えはすまいか。

「真理」(vérité) に拠らないものは必ず破綻する。そこでつぎにこの点に視点を当て，上記の予測を裏付けてみたい。矛盾は勿論，「客観」(objectivité) の側からもたらされるであろう。なぜならもしも「知」の出発が根拠のない「主観的」(subjectif) 独断にあるとしたら，「客観」はそれに添わないことによって事態そのものの側からその欺瞞性をあばくに相違ないからである。実際「知」は自らを「対象」から一たん切り離し無限の領野を開いた上で，再びそこへと立ち戻ることによってその支配を全うしようとしたのであるが，それは実態に基づかない仮定的操作に過ぎないと言うべきであろう。「知」は「対象」なしでは成立しない。主・客関係は相補的なもので，前者が後者を完全にまるごと包摂してはいない。事実私たちの「知」は究極の「物質」(matière) を創り出すことすらできはしない。それは万物の「創造者」(créateur) たる「神」(Dieu) に帰属する事柄であろう。人間は自らの「知」をかりに「神」のそれになぞらえることはできえたにしても，それになり代ることは到底不可能である。したがって人間の「知」はつねに「客観」の側から裏切られる可能性をもっている。それは言い換えるなら，自らの思い込みのつよさと，実際は外部のものに依拠せざるをえない「知」の在りようとのずれであろう。客観的には限界をもちながら，主観的には無限を主張し続けるとしたら，その帰結はおのずから明らかであると言わざるをえない。

ところで私たちは「精神」であると同時に，他方「身（肉）体」であり「物体」である。してみると，ここにこそ矛盾は凝縮されたかたちをもって提示されてこざるをえない。私たちは一身でその代価を支払わされていると言わなければならないのではあるまいか。実際ここでは主・客関係がいよいよもって曖昧にされる状況があり，それはただちに顚倒へとつながってゆく。「精神」の高みにいると思い込んでいればいるほど，主・客関係の必然から「身体」の位置は相対的に下落し，ほとんど「無」(rien) に近いところにまで引きさげられる。そしてそのことは「精神」への反映を招かざるをえない。しかもこの下落の傾向に歯止めがないのは，「精神」の無制約的高揚と対をなしている。したがって「精神」は気付かぬうちに自らを低め，「物質」の位置にまで下降するばかりか，なおそれ以下のところにまで自らを追い込めることさえできる。[8] というのは人間の「知」に特有な心身の分離の観点はどこまでも保有されていて，どのような低落的状況の中にあっても，人は「精神」の上昇とその無限の可能性について根本的疑念にさらされることはついにありえないからである。それゆえに極端な場合には，実際動物以下のところにまで身を落しめていながら，それをしも進歩，発展と錯覚することすら人間には可能である。そこにはいかなる規準も見出せない。それは「精神」が何らの規準も制約も与えられていないことの当然の帰結である。

したがってすべてのものの中で，人類だけが自らを滅亡にまでもたらすことができる。それは他の何もののせいでもなく，人間に特有の本質のゆえである。だがそれはひとり人間だけのことに留まらない。人間が「知」をもって地上のあらゆるものの上に君臨し，その支配の頂点に立つ以上，累は他のすべてに及ばざるをえない。人類の滅亡はたしかにその構造に起因する類固有のことであるのかも知れないが，一方その基本的在り方そのものが他の類への波及を必然的に内包している。その意味では人間は自身は言うに及ばず，地上のすべてのものに責任をもたざるをえない存在であると言えよう。だがすでに見たように，私たちの根底に潜む「類的エゴ」（それは私たちの基本構造と一体のものであるが）は，何ものにも先立つ強力な枠組として私たちを縛り，そこからの脱出を容易に許

そうとはしてくれない。(9)

しかしいま，私たちは一方において，人間だけの無条件的肯定に一抹の疑念を抱きはじめてもいる。それはやはり私たちの外にある客観的状況が，私たち自身を問い返し，その基本的在り方に揺さぶりをかけはじめたことの反映でもあろう。その本性よりして独断の眠りを貪りがちな私たちは，客観の側から動かぬ証拠をつぎつぎと突きつけられない限り，自らの在り方に気付こうとしない。しかし私たちはたとえ遅ればせにもせよ，自らに気付き疑義を提起しうることもまたたしかである。だがこれはすでに何度も指摘したように，「知」の原初的基本的在り方自体からはもたらされようがないことである。そこには「類的エゴ」の強固な枷(かせ)がはめられている。だとすれば私たち人間には，その在りようを異にする別の何かが用意されているということになるであろう。それは何なのか。それについて語ることはここではさし控えざるをえない。しかし少なくともそのものは「エゴ」を超克し，「精神」と「身体」・「物体」との対立を招来せず，主・客関係の枠内に適合しない何ものかであろうことは容易に予測できる。私たちの中にこうしたものもまたたしかに存するということは，一つの希望には違いない。

〔註〕

(1) 旧約聖書「創世記」　第3章7

(2) 同　書　　第3章7～8

(3) 「身（肉）体」と「物体」とは等しく《 corps 》と呼ばれ，言語上その区別をもたない。

(4) 上掲書　　第3章　17～24

(5) 中立的，客観的在り方にこそ「知」の本質を見ようとする傾向は極めて根づよいが，その成立の基盤に立ち原初的なかたちにおいてそれを捉えようとするなら，やはり「知」と「意志」とを切り離すことはできないであろう。したがって上のような見方は二次的であると考えられる。無論以下に触れるように，「知」の展開に限界は設けられていないのであるから，このような見方もまた，「知」に本来的であることは言うまでもない。

(6) この点に限って見れば，人間は蛇が予告したように，また神自身も言明したように，たしかに「神」に匹敵するものになったと言うことができるかもしれない。

（上掲書　第3章5，および22参照）

(7) 人間は地上における比類のない特異な存在，すなわち「孤児」であったからこそ，ひとり抜きん出た「支配者」たりえもしたのであって，これらは無論別のことではありえない。

(8) ここで人間は「塵」からつくられたという聖書の言葉（上掲書　第2章7）が，新たな衝撃をもって甦る。「塵」からつくられたものは「塵」に帰るほかないという恐るべき真実がそこには隠されているように見える。（同書19参照）また一方，ここにおいて私たちは「疎外」(Entfremdung)ということが，「知」の在り方そのものに深く内蔵されていることをも知らされる。

(9) ここでまた，「知」が「罪」の結果として与えられたということが，測り知れぬ重さをもって迫ってくる。

（同書　第2章および第3章参照）